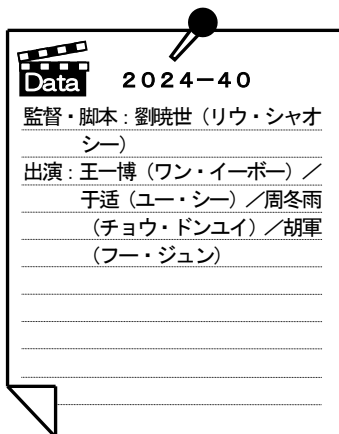




👁️👁️ みどころ

『戦狼2 ウルフ・オブ・ウォー2』(17年)、『シネマ44』43頁)では、吳京(ウー・ジン)演じる「中国版ランボー」が、アフリカの某国で、元人民解放軍の兵士として“大活躍”!中国の目下の最大の課題は、太平洋を隔てて対立する米国との軍事力競争。とりわけ、海軍力と空軍力の競争だ。

「遼寧」「山東」に続く3隻目の新鋭空母「福建」を就航させた中国の海軍力は、太平洋方面に限定すれば、米国とほぼイーブン。なぜなら、空母の質量を含めて世界最大の海軍力を誇る「世界の憲兵」たる米国はそれを太平洋方面と大西洋方面、さらにはインド洋、中東方面にも振り向けなければならないからだ。しかし、某国による中国への領空権侵犯が相次ぐ今、中国では某国に対抗できる、最新鋭の第5世代ステルス戦闘機の開発と、それに搭載する「泰山エンジン」の開発が不可欠らしい。

北京電影学院の美術/監督科で学んだ後、中国航空工業集団に所属し、中国初の空母・遼寧のプロモーション映像などを手掛けた劉曉世(リウ・シャオシー)監督は、そんな思いから本作の脚本を書き、監督することに!

昭和の日本には優れた「スポコンもの」が多いが、鬼教官の下でしごかれる2人のライバルを主人公とし、「テストパイロット」の過酷さを描く本作は、まさにそれ。しかし、「テストパイロット」って一体ナニ?そんな興味を持って、『戦狼2』に続く本作の“ものすごさ”を確認したい。

もっとも、鑑賞後に直ちに大きな拍手を送りたいかどうかは、別問題!

■□■米国が『トップガン』なら、中国は『长空之王』!■□■

若き日のトム・クルーズは少し背が低いものの、カッコ良さでは若手ハリウッドスター

のトップだった。そんな彼が還暦を間近に、戦闘機パイロットを養成する最高機関「トップガン」の教官として復帰してきた近時の作品が『トップガン マーヴェリック』(20年)『シネマ 51』12頁)だった。

同作の導入部では、無人飛行が主流になりつつ今なお、有人でのマッハ10という極超音速飛行を目指すことに夢を燃やし、挑戦し続けている、トム・クルーズ扮するマーヴェリック大佐の姿が描かれていた。同作の核心的なストーリーは、マーヴェリック大佐率いるトップガンの精鋭たちの戦闘機が、米国が誇る空母「セオドア・ルーズベルト」から発射されるところからスタートしたが、さて、その行き先はどこ？そしてその任務はナニ？

米国の最先端戦闘機の開発を巡る現在の問題点は同作の通りかもしれないが、「遼寧」「山東」に続く3隻目の新鋭空母「福建」を就航させた中国の最先端戦闘機を巡る現在の問題点は一体ナニ？もちろん、米国は空母の質量を含めて世界最大の海軍力を誇っているが、「世界の憲兵」たる米国はそれを太平洋方面と大西洋方面、さらにはインド洋から中東方面にも振り向けなければならないから、太平洋方面だけに限定すれば、米中の海軍力は今やイーブン！？そんな視点で本作を見ると、目下の最大の問題点は、米国空軍に負けない「ステルス戦闘機の開発」とそれに搭載する「泰山エンジン」という最先端エンジンの開発らしい。そんな最先端の「ステルス戦闘機」と「泰山エンジン」を今の中国は独力で完成させなければならないから大変だ。昨今の政治情勢に照らせば、そのことには私も納得だが、そんな開発を超短期間で完成させるためには、優秀な技術陣だけではなく、優秀な“テストパイロット”が不可欠だ。

■中国の領空侵犯者は誰？小競り合い(?)の結末は？■

“領海権”を巡っては、近時南シナ海の南沙諸島を巡る中国とフィリピンの対立が顕著だが、“領空権”をめぐる争いはそれ以上に神経質な問題だ。なぜなら、飛んでいる航空機のスピードと海を進む船のスピードは桁違いに違うから、その対処を一步間違えると「すわ戦争！」という大問題に発展する危険性があるからだ。それが世界の常識だが、本作冒頭は某国の戦闘機が中国の領空を侵犯するシークエンスから始まるのでビックリ。しかも、中国の領空を侵犯してきた戦闘機上で交わされる言葉は英語だから、これはひょっとして・・・？

この冒頭のシークエンスでは、領空を侵犯してきた戦闘機の性能が中国機のそれより格段に優れていたため、追尾してくる中国機を軽々と振り切ったために、コトなきを得たが、そんな事態が繰り返されれば中国空軍の恥！北京電影学院の美術／監督科で学んだ後、中国航空工業集団に所属し、中国初の空母・遼寧のプロモーション映像や、パキスタンや、エジプト空軍の映像を制作したという劉曉世(リウ・シャオシー)監督は、そんな思いから本作の脚本を書き、監督することに・・・？

■監督が若手なら両主役も若手！訓練風景はアレと同じ！■

近時私が鑑賞した中国映画で、名前と顔をはっきり覚えたのが、『封神～嵐のキングダム

〜』(23年)、『シネマ 55』220頁)で重要なキャラを演じた若手俳優の于适(ユー・シー)と、『無名』(23年)で梁朝偉(トニー・レオン)と共演した若手俳優の王一博(ワン・イーボー)だ。若き日のトム・クルーズがカッコ良く「トップガン」のエリート軍人を演じた『トップガン』(86年)の中盤は厳しい訓練内容が生々しく描かれていた。近時大ヒットした中国映画『流転の地球―太陽系脱出計画―』(23年)、『シネマ 55』208頁)でも、中国代表がリーダーシップを取る「地球連合政府」が立案した「移山計画」の実行部隊として、「東京スカイツリー」とも「バベルの塔」とも異次元の高さを誇る地上数万キロの「宇宙エレベーター」で上っていく「地球防衛の最前線基地」での、主人公呉京(ウー・ジン)扮する訓練生たちの厳しい訓練風景が描かれていた。

それと同じように、本作中盤では、チャン隊長(胡軍(フー・ジュン))の厳しい指導下で、レイ・ユー(王一博(ワン・イーボー))とドン・ファン(于适(ユー・シー))がテストパイロットのライバルとして競い合う厳しい訓練風景が描かれるので、それに注目！なお、そこに“紅一点”の花を添えるのは航医のシェン・ティエンラン(周冬雨(チョウ・ドンユイ))だが、本作におけるシェンの役割はあくまで「刺身のツマ」・・・？

■□■テストパイロットって何？その任務は？■□■

車の開発競争では、長い間 EV(電気自動車)の開発がテーマだったが、ITの開発競争における現在の焦点はチャット GPTだ。囲碁、将棋界における AI(人工知能)の能力は、一部ではすでに人間を追い越したが、今から 56 年前にあつと驚く発想で大ヒットした『猿の惑星』(68 年)が、今なお手を変え、品を変えてシリーズとして続いていることを考えると、AI による「人間への反乱」もすぐそこに・・・？それはともかく、軍備拡張競争は誰も望まないにもかかわらず、核開発競争が止まらない現実からわかるように、戦争を放棄した「平和憲法」さえあれば、戦争を避け、平和が守られるというのは幻想に過ぎないから、中国と某国との軍事拡大競争はやむを得ないものである上、双方の国家にとっての一大事だ。

潜水艦の質と量はすでに米国に迫につき、空母も三隻体制になったから、太平洋方面だけなら中国と米国との戦力比はトントン！しかし、航空戦力とりわけ戦闘機のステルス性能とエンジン性能においては今なお大きな差があるらしい。かつての日本軍は軍備拡張競争への意欲は強く、優秀な技術開発陣とのタッグの中で、世界最強の超ド級戦艦「大和」を生み出し、世界最強の戦闘機「ゼロ戦」を生み出したが、中国の領空を再三侵犯している某国の戦闘機に比べると、中国空軍の空軍機の性能は全然迫っていないから大変だ。そこで、技術陣が大発奮して研究を続け、完成間近になっているのが「泰山エンジン」だが、それをステルス戦闘機に乗せて各種性能を限界値まで探するためには、現実人間が乗って操縦する優秀な「テストパイロット」が不可欠らしい。なるほど、なるほど・・・。

かつて日本では、梶山李之の企業小説、『黒の試走車(テストカー)』(62 年)等の『黒シリーズ』が大ヒットしたが、そこでは、車の開発における各種データ収集を巡る企業間

の競争が生々しく描かれていた。

「トップガン」はエリートパイロットを養成するための学校だったが、原題『長空之王』と題された本作が描くのは、戦闘機パイロットではなく、テストパイロットとしての任務に命を捧げる若者たちの熱き物語だ。本作導入部に見る過酷な訓練と競争の中で、最終的に「テストパイロットの適性あり」と判断された若者は7名。この7名がチャン隊長の下で、「ステルス戦闘機」と「泰山エンジン」開発のためのテストパイロットの任務を担うわけだが、その中でも特にライバルとして注目される存在がワン・イーボー演じるレイとユー・シー演じるドンだ。しかして、その訓練風景と2人のライバルとしての競い合いは如何に？

■□■限界への挑戦は死と隣り合わせ！隊長は？■□■

私は来る5月25日に東京で開催される司法修習50周年の同期会に出席するが、司法修習26期の私の同期生は約500名、私が配属された1組の同級生は約50名だ。それでも1971年の司法修習試験の合格者は全国で500名で、約40倍の倍率だったから、司法修習生への道は“狭き門”だった。しかし、本作を見ると、テストパイロットに採用される若者はレイ、ドンを含めて計7名だから、超“狭き門”だ。軍国主義の道を歩んでいた時代の日本には、陸軍士官学校から陸軍大学、海軍士官学校から海軍大学という高級軍人になるためのエリートコースがあった。司馬遼太郎の『坂の上の雲』(69年)の主人公として描かれた松山出身の秋山好古・真之兄弟もそこに含まれるが、その教育システムのキーワードは競争だった。つまり、親もカネも関係なく、知力と体力さえ優秀なら、貧乏人の息子でもオーケーという大前提が当時は徹底していたわけだ。それに対して、本作でテストパイロットに選任された7名の超エリートたちは？本作ではそれはよくわからないが、競争システムの徹底ぶりは日本以上、そして『トップガン』と同様のアメリカ仕様の競争スタイルになっているから、それに注目！

他方、飛行機や軍艦の改良、強力化に最先端の技術を要するのはもちろん、その実用化に向けてのテストには危険が伴うことはお避けられない。新薬の開発にもさまざまなテストが必要だが、そのテスト(実験)には普通ネズミなどの動物が使われ、人間が使われることはありえない。しかし、最新鋭ステルス戦闘機の開発やそれに搭載する泰山エンジンの開発ともなると、生身のパイロットが必要で、各種の飛行テストを限界まで繰り返す中で多種多様なデータを積み重ねていく必要がある。

すると、テストパイロットとしての任務は常に死と隣り合わせ！？テストパイロットとして給料をいくらもらっているのか、本作では明らかにされない上、もしそんな職務上の事故で死亡した場合の“見舞金”等についても全然明らかにされないが、なぜ若者たちは大挙してテストパイロット生に志願するの？本作後半に見る、チャン隊長と共にするテストパイロットは本当に危険がいっぱいだ。ある日、チャン隊長とレイが二人で実施したテストでは、現実にエンジンが停止してしまう中、レイはいたたまれず緊急脱出のスイッチ

を押してパラシュートで脱出したが、ぎりぎりまで残ったチャン隊長は・・・？

アメリカの『トップガン』に見るエリートパイロット養成も大変だが、本作に見る中国独自の技術と根性による（？）、ステルス戦闘機と泰山エンジンの開発、そしてそのためのテストパイロットの任務は本当に大変だ。本作中盤では、昭和の日本で大ヒットしたさまざまな「スポコンもの」を彷彿させる、レイとドンライバル競争と、親のような愛情と鬼のような厳しさを持ってその指導にあたるチャン隊長の姿が登場するので、そのアンサンブルをしっかり目に焼き付けたい。

■□■『戦狼2』もすごかったが、本作もすごい！■□■

近時、『1950 鋼の第7中隊（長津湖／The Battle at Lake Changjin）』（21年）（『シネマ54』183頁）に興行収入トップの座は奪われたものの、約1000億円の興行収入を上げて歴代トップとなった大ヒット作が、「中国版ランボー」と呼ばれた『戦狼2』だった。中国が太平洋を隔てて向かい合う米国との軍事拡張競争で米国に「追いつき、追い越せ」を目指すのは、『長津湖』で見たような、制空権を米国に一方的に奪われた状況下で戦った朝鮮戦争へのトラウマがあるからだ。いくら地上部隊は増強できても、空を飛ぶ飛行機から爆弾を雨あられと落下させられたのではたまったものではない。それを撃ち落とすためには、優れた戦闘機が不可欠だ。朝鮮戦争での苦い経験から中国がそう考えたのは当然だから、北京電影学院卒の俊英が本作を監督するについては、実はそんな深い背景が・・・。

もっとも、本作に登場するのは第5世代ステルス戦闘機・J20だそうだが、私の目にはその性能や能力はチンプンカンプン。戦艦の能力や潜水艦の能力なら私にも少しはわかるから、「戦艦モノ」や「潜水艦モノ」は大好きだが、「戦闘機モノ」はせいぜいそのスピードについていける「ゼロ戦モノ」まで・・・？本作のイントロダクションには「中国のライジングスター、ワン・イーボーが挑む本格スカイアクション！」と紹介されているので、動体視力に自信があり、かつステルス戦闘機の知識を備えている人には本作は必見だ。

『戦狼2』で見た、アフリカの某国を舞台に人気スター呉京（ウー・ジン）が演じた「中国版ランボー」の活躍もすごかったが、本作後半からクライマックスにかけて、いったんは落ち込んでしまったレイが見せる見事な復活劇と、2人のテストパイロットの意外な大成功、そして隊長の死を乗り越えた上での感動的なライバルの友情の復活という「スポコンもの」の定番的な感動をすべて詰め込んだ本作もすごいので、それに注目！もっとも、本作を鑑賞した後、“ヤンヤヤンヤ”の拍手を送れるかどうかは、『戦狼2』の時と同じように微妙なところだが・・・。

2024（令和6）年5月21日記